

## 第十七章 沈思と憂愁

池田内閣の後を継いだ佐藤内閣は、党執行部、内閣のメンバーはそのままの体制でスタートした。ただし池田、大平の水ももらさぬ関係を熟知していた鈴木善幸官房長官は、「総理と官房長官は一心同体でなければならぬ」として辞意を表明し、佐藤首相もこれを諒として、そのあとに橋本登美三郎を任命した。これとほぼ同様の理由から、大平も党の筆頭副幹事長のポストを佐藤派の瀬戸山三男に譲って、無役の立場に回った。

年が明けて昭和四十年となった正月、大平は選挙区向けの機関紙『東京だより』に「禍生得意、福育隱微」と題して次のように書いた。

「それにしては昨年は私にとっては大変な年でありました。暗い年ではありましたが、私の生涯にとっては大切な年でもありました。八月六日には長男正樹の死去に遭い、九月九日には池田前首相の入院、十月二十五日には池田さんの辞意表明、そして十一月九日には池田政権の閉幕と佐藤政権の開幕という不慮の出来ごとが相ついで生起し、その舞台回しに明け暮れた年でありました。」

同時に彼はこうしためぐり合わせに直面したさいの心構えにふれ、「時というのは不思議な構造をもってあります。ちょうど川の流れのように、淀みなく静かに流れる時もあるれば、激流や急流となって荒れ狂う時もあります。その時の流れに棹さず人間としては、常に敬虔な気持と周到な注意をもって、これに対処して誤りのないように心掛けることが大切であ

ると存じます。何となれば禍というものは多くは得意の時に生じ、福というものは殆んど例外なく隠微の中に育まれるものですから……」と述懐した。

前年における個人的に最も大きな「暗い不慮の出来ごと」だったのは、言うまでもなく長男正樹の死であった。長男の死によって大平が受けたショックは、その後、池田前首相の発病、入院、政権交代というあわただしさの中で、傍目には何となくまぎれたように感じられたが、彼にとっては、忘れようとしても忘れられぬ痛恨事であった。正樹と死別して二年後の四十一年八月、大平は夫人とともに逗子のホテルにこもり、その心境を吐露した「長男正樹との永別」という追想の一文をまとめている。(『回想録』資料編参照)

正樹は昭和十三年二月六日、当時、横浜税務署長であった大平の長男として横浜の磯子区で生まれた。昭和三十五年には慶応義塾大学を卒業、神崎製紙に入社した。大平は正樹を神崎製紙に二年間勤務させたのち、「わがままをいって引き取らせてもらった」。大平としては、いずれ正樹を政治の道に進ませようと考えており、サラリーマン生活の「深み」にはまらないうちに会社勤めを辞めさせて、自らの身辺で「修養」させたかったようである。

正樹は、三十七年七月から四十力国を回るという外国旅行計画を立て、まずハワイへ出発し、それから約二カ月間、北米、南米を旅した。

同年九月の国連総会に大平外相が出席したさい、正樹はニューヨークで父親と会い、その私的随員として欧州各国を回った後、アムステルダムで父と別れて旅を続けた。ところがオーストリアのウィーンを訪れた頃、正樹は歩行に困難を感じるようになった。これが病のはじまりである。

帰国後の翌三十八年春、坂出市の親類森田家に泊った時、眼科医である森田夫人が眼球に原因不明の出血を発見したので、正樹は東大病院に入院した。医師の診断はペーチェット氏病という難病だということであった。注射、投薬、指圧と手を尽くしての加療が行われたが、間もなく右眼が失明、手足の神経も順次侵されて行った。

当時、正樹の指庄にあたっていた大平家かかりつけのマッサージ師石原博司は、正樹から「病床で歌をつくった。看護婦さんに筆記してもらったので、父に渡してください」と二首の歌を託されている。

ふる里の遠き母より便りあり わがふる里は雪におおわる

春近し雪どけ水の清らかさ 幸ある鳥よ日本をおおう

時のたつにつれて、病魔は容赦なく正樹のからだをいたためつけた。昭和三十九年夏も盛りの八月六日夕刻、正樹はベッドの傍らにいた弟の明に向かって、「旅に出るから靴の用意をしてくれ」という言葉をかけたのを最後に、二十六歳の生涯を閉じた。日ごろ沈着、冷静をもって知られ、取り乱したことの無い大平も、落涙をかくせず、池田首相、前尾前幹事長らが相ついで弔問に訪れると、「ありがとうございます」とただ囁咽するばかりであった。

正樹は多磨霊園に葬られた。パウロ・ミキという殉教死した少年の名をクリスチャン・ネームにしていたことから、墓碑は、大平が「パウロ・ミキ大平正樹」としたため、「父であり友であった大平正芳」とサインした。

長男正樹の死からほぼ一年後の昭和四十年八月十三日、大平は再び身近な人物を失った。池田勇人前首相が死去したのである。

前年十二月二日に退院したあと、静養生活に入った池田は、その後の経過がよく、四十年三月にはがんセンターの久留院長が全快宣言を出すまでになった。池田は安心して財界人の全快祝いに出席したり、一時は郷里の広島に帰る計画まで立てたりした。

七月七日、池田の好敵手であり、また時に協力者でもあった河野一郎が、剥離性動脈瘤で急逝した。葬儀に参列した池田は「残念だったろうな」と河野の死を悼んだ。

それから間もなく、七月十六日の定期診断で、咽喉のがんが再発していることがわかった。「このまま放置すればひどく苦しまれる。体力と気力のあるうちに手術をすれば一年は生きられる」との医師団の判断にもとづいて、池田は七月二十

九日、東大病院に入院。八月四日に手術を受けることとなった。

「手術は成功した。あとは体力の回復を待ただけだ」との医師団の発表がある。

だが、池田の病状はその後悪化して昏睡状態をつづけ、十三日午後零時二十五分、ついに息を引きとった。大平にとって、大蔵省、政界を通じての父であり兄である池田の死は、言いようのない寂寥となって襲いかかってきた。彼は「もう何もかもいやになった。生きていく望みを失った」と、虚脱感をかくそうともしなかった。

池田は、手術に先立って、前尾、大平、鈴木（善幸）の三人を枕頭に呼んで後事を託した。この実質的な「遺言」については、出席したメンバーの間に、最も肝心な点について、微妙だが重要な解釈のちがいがあった、という。

前尾は、池田がハッキリと前尾を宏池会の後継者にすると明言したと考えた。

大平は、池田が前尾を後蓋に指名したわけではなく、ただ、「あとは君たちよろしく頼むよ」と言っただけだったと考えた。したがって、前尾を後継者とするとしても、それは、残ったものたちで決めることだということになる。

鈴木は、池田に対して、宏池会はみんなで盛り立てて行くから、ゆっくり養生してくださいと答えたという。しかし、順序としてはやはり前尾だろうから、前尾と大平の不仲を調整するのが自分の役目だと考えた。

これらの意見を総合すると、誰も前尾が宏池会の後継者になることに反対はしていない。問題は、そのなり方だということになる。結局、宏池会は、前尾がリーダーとなり、長老の周東英雄が代表世話人として運営されることになった。だが、池田の「遺言」の受取り方の不一致は、池田亡きあとの宏池会でのギスギスした前尾、大平関係を生みだした。それは、前尾を「兄貴、兄貴」と言っていて慕っていた大平にとっても、大平を弟分と思って可愛がっていた前尾にとっても、不幸なスタートであった。

このことは、佐藤首相にとっては、奇貨とも言うべきものとなった。自分に対抗する最も強力な派閥の内部に亀裂が起ることは、自派の安定を保証するものにはかならない。これが、佐藤政権が七年八月月つづいた最大の原因だとまで言えは言い過ぎであろうが、宏池会、そして前尾も大平も、これ以後苦しい道を歩まなければならなかった。

前尾との間の口には出しにくい確執、そして佐藤政権からの疎外。この頃の心境を大平は、地元の後援会報『芳友』（昭和四十年七月十日）の中に「つ記した。「人の一生には悦びもあれば憂えもある。得意の朝もあれば、失意に沈む夕もある。栄光を浴びる場合もあれば、辱めに耐えねばならない局面もある。」大佛次郎の小説の題名をもじって、「人生は『照る日、曇る日』だよ」としきりに言っていたのも、この当時のことである。

佐藤首相は、首相就任七カ月目の昭和四十年六月に初めて自前の内閣をつくったが、党内最大の實力者であった河野一郎を切り捨て、旧池田派に対しては、前尾を総務会長に、鈴木善幸を厚生大臣に起用するなどの配慮を行い、人事の妙を發揮していた。反佐藤の大野伴睦はすでに亡く、さらに河野、池田があいついで死去したので、党内には佐藤首相に反旗をひるがえす力のあるものは存在しなくなった。大平はその年の二月に任せられた外交調査会副会長というあまりパツとしない肩書があるだけで、實質的には無役のままであった。

大平の不運に比べて、田中角栄は、とんとん拍子に出世街道を駆け上がり、このときの改造で蔵相から幹事長に就任し、佐藤政権の支柱のような存在となった。

翌四十一年七月の改造人事で、佐藤首相から「党務をまかせると言われていた田中幹事長は、あらかじめ大平に対して政調会長を引き受けるように要請したが、大平は、「ご好意はありがたいが、一体シャッポの方は大丈夫かね」と田中に疑念を呈した。案の定、「大平政調」に対しては、首相の「ノー」の判定が下り、大平は相変らず、無役にとめ置かれた。これにはさすがの大平も、心中穏やかならざるものがあつたらしい。その直後、私邸を訪れた新聞記者に対し、彼は不愉快な表情をかくそうとせせず、「ボクはいま、佐藤さんのバランスシートをつくっているところだよ」と語った。

旧池田派では、前尾が総務会長から北海道開発庁長官という閑職へ回り、鈴木厚相は留任、参議院から塩見俊二が自治相に入った。

こうした状況の中で、昭和四十一年十二月の自民党総裁公選期を迎えたが、宏池会内部では、どのような出方をとるかが論議的となった。「池田路線の踏襲」をつたつたはずの佐藤政権であったが、佐藤首相が四十年秋には『日韓国会』

で日韓条約を強行批准、またこの年の通常国会では建国記念日法案を可決するなど、強い姿勢を押し出しはじめていたからである。

旧池田派内には、若手を中心として佐藤政権のこのような政治姿勢に反発すると同時に、「総裁候補」を擁する派閥としての再出発を求める声があがり始めていた。だが、前尾が立候補をしぶったので、周東、大平を中心に幹部が協議を重ねた末、建前は自由投票だが、事実上、かたまつた形で前尾に投票しようという空気が生まれた。

十二月一日の党大会で行われた投票の結果、佐藤は、投票総数四百五十九票、有効投票四百五十票のうち、二百八十九票を得て再選された。

前尾は投票前夜まで、勝てる選挙ではないから出てもむだだとして、「私の名前は書かないように」と若手の自重を求めていたが、対抗出馬した藤山愛一郎の八十九票について、出馬表明しない前尾が四十七票をとり、同時に灘尾弘吉が十一票、野田卯一が九票を集めた。ほか五票。これら佐藤批判票の合計は百六十一票、投票総数の三分の一を超えて、佐藤政権に衝撃を与えた。

これに先だつ四十一年十一月五日、大平は長年住みなれた団子坂に近い文京区駒込林町の家を引き払った。正樹とともに暮し、正樹が息を引き取った家にはもはや住みたくない。大平夫妻は方位学の専門家とも相談の上、まだ緑の多い瀬田の高台にある新居（世田谷区瀬田八七三の二 現一の二八の三）に移った。

居は気を移すというが、新居に移った大平は、折からの無役の気楽さもあって、読書と原稿執筆に時間を割くことが多くなった。いわば「充電」の時を迎えたのである。月に二度か三度は立ち寄っていた虎ノ門の書店に足を運ぶ回数も目立って増えた。

「本屋の書架で私の足を止めさせるところは政治、経済、法律等とかがおいてあるところというよりは、むしろ、歴史、社会、随筆等の書架である。そこに毎週新たに持ち込まれる新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔かい触覚はたまた

なくうれいものである。生きる悦びを味わうことができる瞬間である。」(『春風秋雨』)

ここには、重なる不運の中で、辛うじて読書三昧に浮世のうさばらしを求めている大平の姿がうかがわれる。

同じ文章の中で大平は、読書の効用について、「(それは)文章の彫琢錬磨にあるのではなく、みずからの生活実践の光明を見出すものである」と述べているが、そういう本人は執筆にも熱心であった。四十一年十月には、すでに記した正樹を回想する「長男正樹の思い出」や、池田政権の回想などを収めた随筆集『春風秋雨』を鹿島研究所出版会から出版した。三十一年の『素顔の代議士』出版以来、十年ぶりのことである。

ちようどこの頃、次男の裕が結婚し、大平家には跡継ぎができたことで、明るい空気に包まれることになった。裕は慶応義塾大学を卒業して古河電気工業海外事業部に勤務していたが、四十年に大平夫妻がかねて親交のあつた遠藤福雄の長女の仲人をつとめた折、聖心女子大に在学中の二女公子を見初めて、塩崎潤(現衆議院議員)夫妻を仲にたて縁談をすすめていた。公子の卒業を待つて春に婚約がととのい、四十一年十月十四日、植松清古河電工社長夫妻を媒酌人としてホテルオークラで結婚式をあげた。大平の新著は、裕と公子の結婚を記念して出版され、「この小著を池田勇人先生と長男正樹の霊に捧ぐ」という献辞が記された。

さて、佐藤首相は総裁公選で三分の一を超す批判票が出たにもかかわらずその後も強気の政局運営を進めていたが、共和製糖事件などいわゆる『黒い霧』問題が発生し、苦しい局面に立たされた。そこで四十一年末の十二月二十七日に衆議院の解散に踏み切り、年末年始をはさんだ選挙となった。三年前の総選挙で外務大臣でありながらトップの座を加藤常太郎に譲った苦い経験から、後援会組織の建直しを図っていた大平は、今度は加藤に三万五千票の差をつけ、七万五千票という香川二区はじまって以来の大量得票で七回目の当選を果たした。

だが、この年(昭和四十二年)二月七日には、郷土そして大蔵省の大先輩であり恩人である津島寿一元蔵相が死去し、さらに十月二十日には、吉田茂元首相が八十九歳の高寿で他界した。

親しかった人々は次々とこの世を去って行く。大平は無役の生活を送りながら、しみじみと世の中の無常を感じたにち

がない。そんな自分の気持を引き立てる意味もあってか、大平は、しばしば周囲のものに、「人間というものは、閑職にあるときこそ勉強できるし、人との交際も密になって、いろいろと得るところが多い。栄光の座に居ることは華やかなようだが、実質的にあまり得るところがない」とその心境を述べていた。また秘書になったばかりの小国宏に対して、「政界はヒューマン。リレーシヨンス・ユニバーシティーだよ。これからも人生学ぶことばかりだ」と自らに諭すように述べたのもこの頃のことである。

この頃大平は、無役の気楽さもあって、めずらしく地元に関連の深い本四架橋問題で国会の質問に立っている。四十二年七月二十日付の『山陽新聞』は、前日の衆議院建設委員会での大平の質問をとりあげて、次のように報じた。

「最近の大平氏は花やかな舞台から遠ざかっているとはいえず、官房長官、外務大臣経験者という「大物」だけに、狭い委員会室は報道陣と傍聴者でいっぱいだった……。大平質問はまず、現在の日本経済の分析から将来の経済構造に至るまでふれ、『大所高所』に立って本四架橋『複数論』をぶちあげた。これには平素、この問題で言質をとられまいと『のらりくらり答弁』で身をかわしていた西村英一建設相も神妙な顔つきで『幅広く考えまして』とうなずいていた」。

政権三年目を迎え、『黒い霧』問題で危うかった総選挙を乗り切った佐藤内閣は、いよいよ自らが政治課題として掲げる沖縄・小笠原返還に本格的に取り組みはじめた。四十二年十一月十四、十五日の両日にワシントンで行われた佐藤首相とジョンソン米大統領との会談で、「この両三年内に沖縄返還の時期について合意すべきであること」、「小笠原諸島は一年以内に返還すること」が決まった。

その帰途、ハワイのホノルルで記者会見した佐藤首相は、帰国早々、党、内閣の改造人事を断行し、挙党体制を樹立することをほのめかす。一年後の四十三年末に行われる自民党総裁公選で三選を果たすと同時に、沖縄返還交渉を強力に進めたいと考えたのである。このころ田中角栄ら主流派の有力者は、新聞記者らに、「大平正芳、中曾根康弘の両氏を起用すれば、今度の改造は成功だ」と語り、人事の焦点を示唆した。

昭和四十三年の佐藤三選に対抗出馬するのではないかとみられていた実力者は、三木武夫と前尾繁三郎であった。このうち、三木は外相として留任のハラを固めていたが、前尾はいかなるポストにもつかず総裁選をめざして態勢固めを図ることとした。佐藤首相は、三年間無役であった大平の三役入りを要請した。

このあたりの事情について、当時の真鍋賢二秘書は、「佐藤派がオヤジさん（大平）の政調会長就任を要請したのは、根底に派閥操縦のねらいがあったにしても、やはり政策マンとしての手腕を高く評価したためであろう。」（真鍋著『私の見た大平正芳』）と述べている。

だが、大平の心境は複雑であった。一年半ほど前の昭和四十一年夏の改造人事のさいに、田中幹事長のもとにおける「大平政調会長」については「ノー」を出しておきながら、福田幹事長とのコンビの形でなら政調会長をやらしてもよいという、「人事の佐藤」らしいやり方に対してである。同時にこれは、佐藤首相にとって、一年後に予想される総裁公選に前尾が出馬する場合、大平を三役にしておけば十分な支援活動ができなからう、ということを見込んだ措置でもあった。大平は前尾とはもちろん、田中とも協議を重ねたが、「保守本流の前尾派は三役の一角を確保すべきである」という派内の強い意向や田中のすすめによって、結局これを受諾することになった。

十一月二十五日に行われた改造人事の結果、党三役は福田幹事長が留任したほか、橋本登美三郎が総務会長、大平が政調会長となり、中曽根康弘は運輸相として入閣した。前幹事長の田中角栄はこの改造人事でも無役にとどまったが、マスコミ等の間では、これは田中を要職につければ、またしても大平 田中ラインが台頭してくることを警戒した佐藤首相の深謀だ、と受け取る向きが多かった。

こうして大平は、昭和三十九年十一月の池田退陣以来三年ぶりに、自民党の三役の一人として再び政界の表舞台に登場した。就任直後の『朝日新聞』の企画「問答さっくばらん」（昭和四十二年十一月二十八日）のインタビュに答えて、大平は政調会長就任の抱負をこう語っている。

「第一、謙虚に行くこと。日本をとりまく内外の環境はきわめて複雑であり、経済の規模も見違えるほど大きくなっているので、柔軟に対処しようと思う。」

第二、先入観にとらわれず、すなおに、かつ長期的にもものを見ていきたい。

第三、前向きに前進するばかりが能ではない。いままでやったことを回顧して、害を除くという再検討も必要と思う。

第四、論議を尽くすこと。これは政府、与党間だけでなく、野党とも国民とも十分な対話を持ちたい。リベラルなふんい気の中で、政策を实らせる素地をつくる。私には派手な旗じるしのようなものは柄に合わない。」

さらに、同じインタビューの中で「池田内閣と違い、佐藤内閣でのむずかしい立場で思う存分に腕をふるえるか」の質問に、「もちろん、自分の考えがスイスイ通るのは望ましいが、いつもそんな具合には問屋が卸すまい。ハードルにぶつかることを気にしないで、やってみようと思う」と答えている。

政調会長として大平が取り組んだ最も大きな課題は、財政硬直化にどう取り組むかという点である。当時の大蔵省首脳は水田三喜男蔵相、村上孝太郎次官（のち参議院議員、故人）であったが、村上次官は三日にあげず政調会長室に詰めかけ、「おとうちゃん、いまのうちに財政を何とかせんと、えらいことになりますよ。赤字また赤字のコメ、国鉄、健保をはじめ、硬直化要因をいまにして取り去っておかなくては」と訴えた。

この問題に対する大平政調会長の見解は次のとおりであった。

「大蔵省の警告を軽視してはならない。われわれは真面目に取り組む必要がある。その第一は大蔵省が『当然増』としてあげた数字自体の吟味である。第二は明年度における財政規模ほどの程度のものであるべきか、という問題だろう。そして、何といっても日本経済の成長を将来に向かってどう評価するか、そして、その展望に立って財政をどのように位置づけるか、という長期的視野をハッキリさせることが、この硬直化問題をとり上げる前提でなければならぬ。」（『エコノミスト』昭和四十二年十一月二十一日号）

また、大平政調会長はこの問題の取り扱い方について、「これまでの大蔵省のやり方にも問題がある。まず大蔵省が大蔵

原案という土俵をこしらえる、党が土俵にあがっているいろいろな注文をつける、それを追加しても大蔵原案の総額はものま……。こんなことが常識の世界で通用するのはおかしい。だから今度は土俵に上がる前に政府と党の間でまず十分話し合つて、感度を合わせる必要があるのではないか（前出「問答さっくばらん」とも述べ、財政硬直化に、政府、与党が同じ立場で一体となつて取り組む必要があることを訴えた。

さらに昭和四十三年一月三十日の衆議院本会議で、代表質問に立つた大平政調会長は次のように述べた。

「硬直化要因を仔細に検討すると、その禍根は財政金融の分野にとどまらず、広く制度や慣行の中に深くその根を下していることが判然とする。……政府の機能が、時代の推移と共に、益々分化する傾向にあることも、これを是認する。しかし、それらの一切の制度や慣行は、財政力の限界内において、時代の要求にキビキビ対応することが要求されていると思う。今日の日本財政はそれが供給しうる栄養分を超える機構と要員と機能を荷なつておるように思えてならない。……真の解決の要諦は、いつまでもなく政府の勇断であり、これを理解し受容するであらう国民の英知である。もはや国民は甘い迎合的な政治の姿勢に顔をそむけつつあると私は考える。私は政府に対し、真実は真実としてこれを国民に伝え、困難は困難として、これを国民に訴える素直な態度を要求する。」

今日のわが国が『行政改革』に遅ればせながらようやく本腰を入れて取り組むにいたつた経過を考えてみれば、大平政調会長がこの指摘は鋭い先見性にみちていたものと言わなければならぬ。

内政における重要課題が財政硬直化であつたのに対し、当時の外交上の重要課題は、沖縄返還交渉とこれに関連した核政策、ベトナム問題などであつた。アジア情勢、核政策の変化、日米協力関係の緊密化が進む中で、時間をかけながら沖縄返還問題解決の方途をさぐるうとした池田政権にくらべ、佐藤政権のそれは、「沖縄の復帰なくして日本の戦後は終わらない」という有名な佐藤首相発言に示されるように、いわば直線的なものだつた。

大平はもともとこの問題について、「年月が経過すれば必ず米国は沖縄を返すであろう」との確信に立ち、早い時期に返還要求を米国につきつけることは、「核兵器体系が漸次、ICBM、ポラリス潜水艦中心になり、沖縄のようなところにある核基地が不要になってくるならば別として、核基地を含む返還交渉も十分考究しなければならない課題となる」との認識を持っていた。ものが熟さぬうちに早く返せという論議を出せば、米側が核つき返還とか、何か他の問題との取引を持ち出し、そのことが国内政治にハネ返って激しい論争になりかねない。大平はそういう懸念を抱いていたのである。結果的には、四年の歳月をかけたあと、米側が昭和四十七年五月十五日に沖縄を核抜きで返還した。大平の懸念が一面では杞憂に終わり、また別の面では的中した感が深い。四十三年一月の代表質問で大平政調会長はこの問題にふれ、「沖縄問題の討議の中心は、安保条約と核政策に集中している。だから私は、総理の昨年来の努力の成果は、沖縄問題の論議を、その中核問題に誘導したことであったとさえ、考えるものである」と発言し、これに対して佐藤首相が「拙速であつてはならない」という大平君のご注意があつたが、重大な国家利益の観点から与野党を問わず、国民全体のご支援、ご理解を期待している」と答えているのは、沖縄問題をめぐる両者の方法論の違いを感じさせる異色の論議であつた。

さらにこの代表質問では、大平と佐藤との間に、核政策についての問答も行われている。この中で大平はまず、「好むと好まざるとにかかわらず、核問題はこれからの政治が取り組まなければならない最大の課題にならう」と指摘したあと、「核政策について一見、与野党が一致しているかに見えるが、実はそうではない。政府はしばしば核持込みを認めない方針を明らかにしているが、それとは逆に、政府は密かに持込みを黙認しようとしているかのように宣伝し、不安をいわれなくかき立てている動きがみられるのは不幸なことである。核に対する正確な知識の摂取に日本がアレルギー的であつてよい道理はない」と述べ、政府が不退転の決意をもって、核政策に対する国民の理解を求めよう要請している。

佐藤首相はこれに対して、核兵器を「作らず、持たず、持ち込ませず」の非核三原則を改めて強調したうえで、「核問題に対する基本的政策については、安保条約を除くその他の点においては、与野党ともほとんど完全に一致していることは大

きな意味がある」と述べ、核拡散防止条約承認への決意を表明した。（『回想録』資料編参照）

昨年、ライシャワー元駐日米大使が明らかにしたことだとして、同大使が東京在任中に、当時の大平外相に会い、米国の核積載艦艇が日本に寄港するかどうかの問題について、日本側が米国が事前協議の約束を守っていると信頼しているとの国会答弁を繰り返していることは米側としては困る、と申し入れ、大平外相も「わかった」との意向を示したと言われる。大平外相が果たしてライシャワー大使の要請に本当にそう答えたかどうか、外務省にも記録がないため事実関係は明らかではない。しかし非核三原則の第三項（持ち込ませず）の解釈と運用について、日米安保条約との関連で、大平が政府の事なかれの態度に疑問を抱きつつつけていたことは確実である。

このほか、大平政調会長は、昭和四十三年四月四日に衆議院本会議で、当時北爆停止を声明したジョンソン米大統領の再選不出馬表明に関連して野党側が主張している佐藤退陣論に反論し、「佐藤政権の命運は、かかる時代に対処して、世界における日本として、その生存と名譽と繁栄のために、どれだけの能力を発揮できるにかかっておるのであって、他国の政権交代によるものではない」とこれを退け、佐藤政権がベトナム問題、経済運営、そして中国との関係調整に真剣に対処していくよう強く求めた。

一方、田中角栄は、大平が政調会長在任中、都市調査会長として都市問題に取り組み、のちに政権を目指すさいの入口ガンとした『日本列島改造論』の基礎固めを行うかたわら、米価調査会長としてコメの問題と取り組んでいた。四十三年七月の米価シーズンのころ、生産者米価をめぐる党内論議が紛糾したさい、大平政調会長がなみいる農林議員たちの心底に訴えるような発言を行って、事態を収拾に導いたエピソードを、田中は『回想録』追想編で、あましこう綴っている。

四十三年産米の生産者米価の引上げをめくって論議が沸騰、総務会では米価引上げを求める農林議員の厳しい発言が相

ついで出されていた。ある日、田村元、田村良平両総務が「もともと立つて、わが党が農業に理解が足りないから、こんな低い米価が議題になっているのだ。大平政調会長などは大蔵省のエリート官僚出であり、農民生活などを知らぬからこんな事態を招いたのだ。直ちに辞職して、退席せよ」とブチ上げた。

大平政調会長はだまって聞いていたが、こうした論議に愛想が尽きたのか、席を立とうとした。この時、隣の席の田中米価調査会長が腕をつかんで引きとめ、「腹を立てて席を立つ奴があるか。席を立ったら再び戻れないよ」とたしなめた。大平はしばらく一点を見つめてだまっていたが、やがて口を開き次のように述べた。

「両総務は私に、大平は百姓の生活を知らないと言われたが、あなたたち両君とも父君はわれわれの先輩代議士であり、名門の出で、裕福な家庭で育った方だ。それにくらべ私は、讃岐の貧農の倅である。私は少年の頃、夜明けと共に家を出て、山の中腹にある水の少ない田圃を見回ったのち、朝一番の汽車で通学するのが日課であった。家貧しく学資も少なく、給費生として勉強し、漸く大学を終えたのである。このような大平正芳が農業を知らない人といわれることは心外である。」

田中はこの文章の中で、「私の初めて聞いたハラの底にひびく大平君の発言だった」と述べている。この大平発言がきっかけで、総務会の米価の取扱いは、党三役および米価調査会長に一任されることとなり、会合のあと、橋本登美三郎総務会長にかわって記者会見した小泉純也副会長は、両眼に涙を浮かべながら「きょうの総務会での大平さんの発言は本当にりっぱでした」と言葉をつまらせた。